

平成 27 年度 表彰者紹介・授賞理由

木村賞

遊川 知久 氏 (国立科学博物館筑波実験植物園)

遊川知久氏は国立科学博物館筑波実験植物園の研究者として、ラン科を中心とする研究ばかりでなく、特に本植物園が所有する熱帯雨林温室、熱帯資源温室及びサバンナ温室の統括責任者として、その充実に多大な貢献を果たした。さらに日本植物園協会の植物多様性保全委員会の委員長としても絶滅危惧植物の保全を中心に活躍されている。以上の点から、遊川氏は日本植物園協会の表彰規程に照らし、木村賞を受賞するにふさわしい人物であると確信した。

植物園功労賞

篠原 秀順 氏 (京都府立植物園)

京都府立植物園に勤務して以来、様々な植物の育成管理に努力し、特に温室係に就いてからは、主にポインセチアやカラジウムをはじめとするサトイモ科の植物など、各種展示会に使う鉢物の育成管理や品種保存、新品種の導入などに力を入れ、展示に合わせた独自の栽培体系の確立に取り組んでいる。

冬の企画展示のメインとなっている「ポインセチア展」においては、展示手法を毎年検討しながら展示会の質の向上に努め、また、夜の観覧温室開園やファンクラブ会員向け行事などにおいてガイドを務めるなど、園の行事においても貢献度は高い。

坂崎奨励賞

亀谷 芳明 氏 (内藤記念くすり博物館附属薬用植物園)

亀谷氏は平成 14 年より当園の薬用植物の育成を担当する技術職員として勤務している。同氏は植物の栽培展示のみならず、薬草栽培教室における栽培指導や講義、ボランティアグループのマネジメントなど地域の社会活動の推進にも活躍している。また、他園の種苗提供やその栽培指導への協力を惜しまず、講演活動や地域紙へのコラム寄稿など、薬草に関する知識を広く紹介する活動も行っている。特筆すべき点として、国内の観覧温室では初となるマンゴスチンの結実を 2009 年 12 月に成功させた他、これまで栽培困難とされていたチンネベリーセンナの栽培にも優れ、日本植物園協会の種苗交換会にも毎年種子を提供するなどの実績を積んでいる。

Aboc・CULTA 賞

Aboc・CULTA 賞は、特定非営利活動法人植物分類名称研究所 (NPO The Institute for Cultivated Plant Taxonomy) 及びアボック社からの寄付に基づき設立した賞で、植物園および関連施設における植物の学名や栽培品種名の適切な表示および利用の普及を振興するために授与するものである。(平成 21 年－30 年)

島田 有紀子 氏 (広島市植物公園)

消失の危機に瀕している変わり葉ゼラニウムの園芸文化史に関する調査を行った。日本で唯一、大正時代から本植物が残っていた愛知県の園芸店主のもとで、葉芸の特徴や流行時の様子などを聞き取り調査するほか、国会図書館や文献収集家を訪ね、資料の収集や確認、銘鑑の撮影を行った。また、輸入時の名前（原名）と日本名を照合したり、種々の文献から品種名を抜き出して 300 品種以上の来歴情報を整理した。その成果を広島市植物公園紀要で報告するとともに、50 品種の保存と展示、解説に注力している。